

# 中世東国文献におけるウ列オ列の交替表記をめぐって

梅 崎 光

(1999年10月15日 受理)

On the alternations of “-u” and “-o” Kana - letters in Medieval East Japan

UMEZAKI Hikaru

## 0. はじめに——米沢図書館蔵書にみえる交替表記——

かつて、《米沢図書館蔵『和玉篇』(以下、米沢本倭玉篇と称する)の字音の拗音表記において、ウ列拗音とオ列拗音との交替表記がサ(ザ)行に集中してあらわれる。しかして、そのような表記の状況は、米沢本の編者自身の方言のありさまの露出したものである》との推定をのべた<sup>(注1)</sup>。

そのときに問題としたのは、以下のような交替表記の例である。いま、その一部を再掲する<sup>(注2)</sup>。

(1) ショ(ジョ)とあるべきものがシュ(ジュ)と表記されているもの——のべ17例

- ・助(047・23・シュ)
- ・所(112・76・シュ)
- ・植(019・18・シュク)
- ・濁(035・58・シュク)
- ・辱(119・35・ジュク)

(2) シュ(ジュ)とあるべきものがショ(ジョ)と表記されているもの——のべ53例

- ・手(051・11・ショ)
- ・受(152・71・ジョ)
- ・宿(091・17・シヨク)
- ・旬(001・48・ジョン)
- ・舜(152・64・シヨン)

こうした表記の傾向があらわれる理由を、現在の山形県・新潟県・長野県あたりに分布している、ウ列拗音とオ列拗音の合流という方言的特徴<sup>(注3)</sup>にもとめたのであった。

さて、同館にはまた、『纂図附音集註千字文』(以下、米沢本千字文と称する)上中下3巻3冊を蔵する。毎冊「興譲館蔵書」の蔵書印を有するこの文献は、米沢本倭玉篇とおなじく旧米沢藩時代

からの蔵書であるが、その来歴についてはあまりあきらかではないようで、「米澤善本解題」にも「この本は鎌倉頃の鈔本を近世になつて書写したものと思われるが、序跋を缺くので、もとづく所は明らかにできない」<sup>(注4)</sup>とのべてられているところである。元禄12年6月の時点における米沢藩蔵書の記録である『官庫御書籍目録』に「三番乾五日 長持一棹入／……161 千字文 (三)」<sup>(注5)</sup>とあるのがこの文献であるとすれば、それ以前に書写されたものであろう。

ところで、この文献の訓点には字音注がふくまれている。この訓点はおそらく、本文書写時に移点されたものであろうが、部分的な加点もなされているようである。このうち、拗音表記において、米沢本倭玉篇と共通する点がある。すなわち、用例数はすくないが、以下のような表記がみられるのである<sup>(注6)</sup>。

### (3) ウ列拗音とオ列拗音の交替表記 (米沢本千字文)

- ・宿 ショク (上05ウ), 肅 ショク (上07オ), 孰 ショク (中23ウ), 淑 ショク (下20ウ)  
(以上, シユ→シヨ)
- ・黜 チョツ (下05オ) (以上, チユ→チヨ)

まずのべておこなうならば、この米沢本千字文の(部分)加点者と米沢本倭玉篇の编者(または、音注を付した人物)が同一人物ということはなさそうである。筆跡をみると字形の類似点は特にみいだせないし、たとえば米沢本倭玉篇では拗長音のうち合音を一般に、「勝 (006・83・セウ)」のような「eウ」というかたちで表記するのに対し、米沢本千字文では「徴 チョウ (中11オ)」のような「iヨウ」形の表記も頻出するというように、表記の傾向にも差があるのである。

ここにおいて米沢本千字文に見える上記のようなオ列拗音とウ列拗音との交替表記も、米沢本倭玉篇とおなじ方言的事象の反映したものようである。

もっとも、このばあい、当該パターンの混同表記例がさきほどの5例にとどまるゆえ、単なる偶発的な誤写という可能性がある。その点が上記のような推定の難点といえるかもしれない。だが和玉篇のような辞書とちがって、すべての漢字に音注が付されるわけではないというこの文献の性質上、

- ・手 シユ (下16ウ), 峻 シユン (下01ウ), 嘯 シユク<sup>(注7)</sup> (下18オ)
- ・黍 シヨ (下04ウ), 庶 シヨ (下07オ), 煮 シヨ (下13ウ), 穡 シヨク (下04オ),  
稷 シヨク (下04ウ), 植 シヨク (下09ウ), 辱 ジヨク (下09ウ), 属 シヨク (下13ウ)

のような、異例でない表記自体もそれほど多数出現するわけではない。この文献が米沢に伝来しているという外的条件からも、上記のような交替表記は方言的特徴の露出したものとみてよいのではないか。

## 1. ウ列拗長音とオ列拗長音の交替表記

ところで、ウ列とオ列の交替表記といえば、米沢本倭玉篇には、下記(4)のようなウ列拗長音とオ列拗長音の交替表記がみられたのであるが、この点に関しては(5)にしめすように米沢本千字文にも同様の傾向が観察される。

### (4) ウ列拗長音とオ列拗長音の交替表記（米沢本倭玉篇）

オ列 → ウ列

- ・頬 (094・43・キウ)
- ・抄 (023・15・シウ<sup>(註8)</sup>), 招 (052・54・シウ), 抄 (056・33・シウ)
- ・輒 (096・42・チウ), 𨔵 (101・81・チウ), 𨔵 (139・22・チウ)
- ・耀 (025・58・ユウ), 鷓 (062・45・ユウ), 遥 (082・84・ユウ), 孕 (099・23・ユウ),  
 么 (183・11・ユウ), 幼 (183・26・ユウ)
- ・楞 (023・14・リウ)

ウ列 → オ列

- ・袖 (103・12・セウ), 州 (139・73・セウ), 秀 (163・71・セウ), 十 (162・11・ゼウ)
- ・儔 (010・31・テウ), 忠 (065・51・テウ), 綱 (126・51・テウ), 稠 (144・13・テウ),  
 雕 (153・25・テウ)
- ・誘 (013・55・ヨウ), 柚 (021・73・エウ)

### (5) ウ列拗長音とオ列拗長音の交替表記（米沢本千字文）

オ列 → ウ列

- ・矯 キウ (上28オ), 嬌 キウ (下16ウ), 供 キウ (上19オ), 恭 キウ (上18ウ),  
 業 キウ (下04オ), 仰 \*キウ (下22オ), 狂 \*キウ (上26オ), 姜 \*キウ (中11ウ)
- ・遥 ユウ (上15ウ)
- ・凌 リウ (中30オ), 涼 \*リウ (下17ウ)

ウ列 → オ列

- ・窮 \*キヤウ (中11オ)
- ・愁 \*シヤウ (上19オ)
- ・抽 テウ (下12ウ)
- ・攸 ヨウ (下13ウ)
- ・窿 リヨウ (上04オ)

上記(5)のうち、\*のついた例は、当該漢字の字音がオ列長音の開音に由来するはずのものである。これら以外にも、米沢本千字文には、以下のような開合表記の混乱例がみられる。これは、これら

の加点がかなりおそい年代のものであることをうかがわせるものである。

(6) 米沢本千字文の開合表記混乱例 (一部)

- ・響 ケイ<sup>(註9)</sup> (上27ウ), 姜 ケウ (中22オ), 匡 ケウ (中24オ), 襄 ショウ (上28ウ),  
情 ショウ (中12オ), 商 ショウ (中18ウ), 暢 テウ (中14オ), 驤 チョウ (下17ウ),  
倒 トウ (中13ウ), 堂 トウ (中13ウ), 領 リョウ (上16ウ), 糧 マウ<sup>(註10)</sup> (上27ウ)
- ・道 シヤウ (下12オ)
- ・然 シコウシテ (上23ウ), 然 シコウシテ (中08ウ), 啓 モウシテ (中02オ)

さきにのべたように, 旧米沢藩蔵書のなかには, 中世末期から近世初期にかけて書写・編纂されたとおぼしき文献のうちに, 東国方言的特徴が反映しているとみられる(1)から(3)に例示したような部分がある。前稿においては, 米沢図書館蔵『沙石集』(以下, 米沢本沙石集と称する)のフリガナにみられるという(7)のような表記<sup>(註11)</sup>も, ここで問題にした方言的特徴によるものであるとした。

(7) ウ列拗音とオ列拗音の交替表記 (米沢本沙石集)

- ・頌 趣 守 宿 主 衆 就 種 首 受 (以上, シュ→シヨ)
- ・諸 所 序 濁 食 女 助 疏 色 職 触 処 (以上, ショ→シュ)
- ・居 (以上, キョ→キュ)

また, 前稿ではふれなかったが, 米沢本沙石集の拗音表記に注目した片岡氏論文においては, (7)のような例とともに, (8)のような, (4)や(5)と同様のウ列拗長音とオ列拗長音の交替表記が存することも報告されていた。

(8) ウ列拗長音とオ列拗長音の交替表記 (米沢本沙石集)

- オ列 → ウ列
- ・恭 (キウ) 橋 (キウ) 巧 (ギウ) 脇 (キウ)
  - ・乗 (ジウ) 證 (シウ) 昇 (シウ) 承 (シウ) 勝 (ジウ) 丞 (シウ) 乘 (シユウ)
  - 照 (シウ) 焼 (シウ)
  - ・調 (テウ)
  - ・女 (ニウ)
  - ・楞 (リウ) 稜 (リウ) 料 (リウ) 了 (リウ)
- ウ列 → オ列
- ・宗 (セウ) 舟 (セウ) 秀 (セウ)
  - ・虫 (テウ) 註 (テウ) 重 (デウ)

・隆（レウ） 龍（レウ） 立（レウ）

このように、旧米沢藩蔵書中には、おなじ方言的特徴を反映するとおもわれる表記の傾向をもった文献が複数存在するのである。米沢本千字文もそうした資料の一部ということになる。

ただし、前稿においてのべたように、こうした文献に「ウ列拗長音とオ列合音との交替表記がみられることは、この文献が室町時代末期から江戸時代初期の成立であることからみて、そうめずらしいことでもない」<sup>(注12)</sup> という判断も可能かもしれない。中世末から近世初期にかけての東国文献に、(4)(5)(8)のような交替表記がよくみられるのは事実だとしても、そのような交替表記が存することのみをもって、ただちにそれを東国方言に特徴的な要素と断ずることはできないとおもうからである。

それはなぜか。こうした長音におけるウ列とオ列の交替表記が中世末からさかんに出現し、近世初期のある時期から衰退していった背景には、

#### (9) 開合がおよぼした影響

オ列長音の開音が合音に接近することで開合の区別を解消しつつあった時期に、この区別を保持するべく合音がウ列長音（拗長音に限定されない）に音価を近似させた。

という事情が想定される<sup>(注13)</sup>。とするならば、オ列長音の開合の区別がいままでのこっている段階の言語（東国方言以外の中央語など）には、この区別が解消されるまではそうした音価の動揺がおこりうる可能性があることになる。実際、先行研究において指摘された<sup>(注14)</sup>ように、かならずしも東国で成立したとはかぎらないさまざまな種類の文献にこうしたウ列拗長音・オ列拗長音の交替表記がみられるのである。

## 2. 交替表記の解釈をめぐって

さて、迫野氏文献では、中世末から近世初期にかけて成立した東国文献におけるこうした表記の交替現象を材料に、当時の東国方言でオ列長音の開合の区別がどのような状態にあり、またそれが東国各地の方言にどのような影響をおよぼしていたのが問題にされている。それによると、東国各地の方言において開合の区別はなお保持されつつも、最終的な合流にいたる直前ともいうべき状態にあり、次第にその混乱例をふやしつつあったということのようである<sup>(注15)</sup>。(1)から(8)までにあげたのと同様のウ列とオ列の交替表記については、(9)のように、開合の区別を保持しようとする要請から音価の接近が生じた結果であろうとされている。

しかしながら、そうした表記の交替現象が観察される東国文献における、実際の表記のあらわれかたには、各文献ごとに小異がある。これは同一の音韻変化によって表記の交替現象があらわれているとしても、それが音声の実質に100パーセント忠実なものであるとはかぎらないゆえ当然のことであり、カナ資料にかぎらず文献に記録された資料のつねである。伝統的な表記法との拮抗のなか

で、口頭の言語における発音習慣を反映した表記がそれにたまたま違反したばあいに、かろうじてその様相の一端を観察できるのである。

であるからには、各文献におけるそうした小異をどう解釈するかは微妙な問題であり、慎重な態度をもってのぞまなければなるまい。そういった意味から、たとえば、つぎのような解釈がどの程度妥当であるのかをここで検討しておく必要がある。

『天正狂言本』<sup>(注16)</sup> (以下、単に天正狂言本と表記) といえ、その表記や語彙などに東国方言の反映がみられるとして注目されてきた文献である。近年、その天正狂言本にみられるウ列とオ列の交替表記例に関して以下のような分析と仮説の提出とがなされた<sup>(注17)</sup>。

まず、天正狂言本における当該事象では、ウ列音とオ列音の母音の長短のちがいが重要であるとのことである。たとえば、短母音では「オ列→ウ列」の交替表記例が15種22例、「ウ列→オ列」が15種15例みられ、「両者の間に有意の差は認められない」とされる。一方、長母音では「オ列→ウ列」が20種25例、「ウ列→オ列」が9種57例であり、「異なり語数で見ると、明らかに数量的な偏りが認められる」とされる。

つぎに、米沢本沙石集における当該事象について、片岡氏の調査報告の結果によって、

拗長音では天正狂言本とは逆に「オ段→ウ段」の方が用例が多く現われているという。加えて同書(梅崎注:米沢本沙石集のこと)では、拗音(短母音)の交替例は一例(白居(キュ)易)を除きすべてサ(ザ)行で占められているとも報告されている。天正狂言本ではサ(ザ)行以外の行にも短母音の交替例は少なからず存するから、この点でも両文献は明らかに状況を異にしている。<sup>(注18)</sup>

という判断がなされた。

最後に、「成立年代も出どころも近い関係にあるはず」の天正狂言本と米沢本沙石集のこうした「差」を説明するため、つぎのような仮説が提出されている。

長母音においては、当初は行の別に関わりなくオ段がウ段に接近する形で両韻の曖昧化が進行したが、その後サ(ザ)行のみ逆の方向、即ちウ段がオ段に接近するという形を取るようになった。一方、短母音においては、まずサ(ザ)行において両韻の曖昧化が生じ、次第にそれ以外の行へと波及していったというものである。<sup>(注19)</sup>

ここでサ(ザ)行という条件が提出されているのは、(10)のような用例数の分析によって、サ(ザ)行における交替表記の分布のかたよりが注目されているからである。また、こうした仮説によれば、「天正狂言本と米沢本沙石集との違いは時間的な差(米沢本沙石集が先で天正狂言本が後)として処理できることになる」<sup>(注20)</sup> とのことである。

(10) ウ列音とオ列音の交替表記(天正狂言本)<sup>(注21)</sup>

〈長母音〉

〔オ段→ウ段〕 サ(ザ)行0例 その他の行20例

[ウ段→オ段]	サ(ザ)行 8例	その他の行 1例
〈短母音〉		
[オ段→ウ段]	サ(ザ)行 5例	その他の行 10例
[ウ段→オ段]	サ(ザ)行 8例	その他の行 7例

以上が、内山氏文献における交替表記の解釈である。以下、これについて吟味する。この仮説の一番の問題点は、「成立年代も出どころも近い関係にあるはず」の米沢本沙石集と天正狂言本のあいだに、こうした大規模な変化の結果がそれぞれ反映しているとされることである。ただし、両文献の正確な成立年代が不明である以上、そうした推定を積極的に否定するような材料もみあたらないゆえ、この点に関しての判断は保留しておく。

さて、さきの仮説の長母音に関する推定のうち、「行の別に関わりなくオ段がウ段に接近する形で両韻の曖昧化が進行した」という部分は、米沢本沙石集における拗長音表記の状況にもとづいているようである。(8)にしめしたデータによれば、たしかに「オ列→ウ列」の交替表記例の方が特定の行に集中することもなく、また用例数もおおい。(ただし、それが数量的観点から意味のある考察の根拠となりうるものであるとは、筆者にはおもえないのであるが、その点はしばらくおく。)

このうち、サ(ザ)行・タ(ダ)行・ラ行においては、オ段拗長音とウ段拗長音とのあいだで双方向の交替表記がみられる。つまり、交替表記の出現数の多寡が、オトの変化の方向をある程度反映するという前提にたつならば、米沢本沙石集にみられる事実だけからは、ウ列音の音価がオ列音の音価に接近する方向の変化をまったく否定するのは困難である。おそらく、(9)のような開音からの圧力という想定のおかげでこうした推定がなされているのであろう。

では、(10)の〈長母音〉におけるサ(ザ)行の分布のかたよりが根拠になっているとおもわれる「その後サ(ザ)行のみ逆の方向、即ちウ段がオ段に接近」という推定のほうはどうであろうか。

厳密に言えば、それまで「シュー」「ショー」という2種類の音であったものが、その区別をうしななって合流するとき、その音価が[ʃo:]への収束という方向でなければならない義理はまったくない。これが[ʃu:]であっても、理屈のうえからは「ウ列→オ列」「オ列→ウ列」両方向の交替表記が生じうるのである。

しかし、このばあい、交替表記のかたよりが徹底していること、これ以外にも天正狂言本の筆録者が発音の区別に注意して表記を工夫している節がある<sup>(注22)</sup>こと、共通語の「シュー」にあたる音節が「ショー」と発音される庄内方言の存在などからすれば、このような交替表記のかたよりが当時の実際の発音の傾向を反映しているという推定も信憑性をおびてくる。

だが、かりに、表記に反映した状態を、一方は「ショー → シュー」、もう一方が「シュー → ショー」というオトの変化によって出現したものだとして、《当初「ショー」が「シュー」に接近していたものが、のちに「シュー」が「ショー」に接近する方向に逆転した》という順序のつけかた自体の根拠がうすいことは否定しがたいのではなからうか。

つぎに、短母音に関する解釈は、そもそもその根拠をどこにもとめうるのであるのかが疑問である。

この議論のもとになった片岡氏論文では、米沢本沙石集の拗音表記の記述に主眼がおかれている。そこであきらかにされたことは、ウ段拗音とオ段拗音との交替表記が、長母音においては各行にわたってみとめられ、短母音においてはサ(ザ)行に偏在(例外は「白居易」の「居」のみ)しているということであった。つまり、(12)にしめしたとおり、片岡氏論文のデータからは、直音のばあいにはオ段ウ段の交替表記がどの程度みられるかということについて正確なことはわからないのである。

一方、「天正狂言本ではサ(ザ)行以外の行にも短母音の交替例は少なからず存する」というのは、内山氏文献303頁から306頁にかけて提示された用例をみるに、たとえば「魚」が「おを」と表記される直音の例などもふくめての言とおもわれる。とすると、ここで比較されている用例の性質は、天正狂言本と米沢本沙石集とでかなり差があることになりはしまいか。

そこで、用例をもとに、(10)の表を検討してみることにする。ここでは短母音におけるサ(ザ)行以外の交替表記例がことなり数で17例カウントされているが、このうち、拗音にかかわりそうなのは、「きふたふ(魚頭)」「ゆわひ(齢)」くらいのものである。しかも前者は長音として処理する余地もあり、後者は/w/の直前という環境に規定されたものである可能性がある。結局、サ(ザ)行以外では、この2例のほかはすべて直音における交替表記例である。逆に、(10)において、短母音におけるサ(ザ)行の交替表記例としてカウントされている13例のうち、直音の例は「いすきて(急ぎて)」のみであり、ほかはいずれも「シュ」と「ショ」という拗音における交替表記例である。

(10)を、直・拗の別を考慮にいれて整理すると、以下ようになる。便宜上、ヤ行は拗音に撰している。

(11) 直・拗の別を考慮したウ列音とオ列音の交替表記(天正狂言本)

	サ(ザ)行	その他の行
〈拗音・長母音〉		
[オ段→ウ段]	0	19(うち、開音由来のものが4例)
[ウ段→オ段]	8	0
〈直音・長母音〉		
[オ段→ウ段]	0	1(「参るう」—参籠)
[ウ段→オ段]	0	1(「とうゑん」—通円)
〈拗音・短母音〉		
[オ段→ウ段]	4	2



[ウ段→オ段]	8	0
〈直音・短母音〉		
[オ段→ウ段]	1	8
[ウ段→オ段]	0	7

上記の表からあきらかなように、天正狂言本においてサ（ザ）行以外の行に短母音の交替表記例がみられるのは、直音のばあいが大部分であり、逆に拗音（短母音）の交替例は2例をのぞきすべてサ（ザ）行でしめられているのである。比較のために、同様の数量的整理を(8)の例についておこなうと、(12)のようになる。ただし片岡氏論文ではヤ行を直音として処理しているため、ここにはヤ行音の例はカウントされていない<sup>(注23)</sup>。

## (12) 直・拗の別を考慮したウ列音とオ列音の交替表記（米沢本沙石集）

	サ（ザ）行	その他の行
〈拗音・長母音〉		
[オ段→ウ段]	8	10
[ウ段→オ段]	3	6（「龍樹（レウジユ）」を含む）
〈直音・長母音〉		
[オ段→ウ段]	?	?
[ウ段→オ段]	?	?
〈拗音・短母音〉		
[オ段→ウ段]	12	1（居）
[ウ段→オ段]	10	0
〈直音・短母音〉		
[オ段→ウ段]	?	?
[ウ段→オ段]	?	?

? 部分は未調査

(11)と(12)からいえることは、天正狂言本においては拗音の長母音については交替表記の方向が一定しているということ、それに対して、沙石集においては、交替表記の方向にユレがみえるということである。一方、短母音の拗音に関しては、オ段とウ段とで交替表記のみられるばあい、それがサ（ザ）行に集中しており、この点に関して、天正狂言本と米沢本沙石集とはおなじ状況を呈しており、両者のあいだに大差はないのである。

以上で、さきほど紹介した、天正狂言本と米沢本沙石集にみえるウ列・オ列の交替表記に対する

解釈が成立しがたいということを説明しえたとおもう。

カナ表記の背後にある口頭言語の音価について、表記の分析だけからは、決定的なことはいえない。カナ表記の分析からわかることは、まず、当時の表記の実態なのであり、そこからさらに可能なことといえば、実態としての表記法が、規範とされていた(と推定される)表記法といかにずれているかをてがかりに、文献の背後に存する言語における音韻的な区別の存在や消失を云々することなのである。

結局のところ、ウ列・オ列の交替表記にうかがえるオトの様相に関して、天正狂言本と米沢本沙石集とのあいだの質的差異がさほどおおきいとはおもえない。拗長音の表記の異例が、サ(ザ)行とそれ以外の行とで相補分布といってもよいような出現のしかたをすとしても、ウ列音とオ列音との区別があやうい状況を反映している点において両者が共通していることのほうをまずは重視すべきである。区別のあやうくなったオトをふくむ語をどう表記するかというのは、すでに文字の運用に関する問題なのである。

ただし、オ列長音の開合の区別については、米沢本沙石集はそれをよく保持しているとのことである<sup>(注24)</sup>。(11)にしめしたように、合音のみならず開音とウ列音との交替表記<sup>(注25)</sup>がみられる天正狂言本とは、その点において質的な差をもっているといえるかもしれない。

### 3. おわりに

本稿のおもな内容は以下の2点である。

まず、米沢図書館蔵『纂凶附音集註千字文』の字音注には、米沢本和玉篇と同様の拗音表記の混乱がみられることを報告した。

ついで、《オ列・ウ列の交替表記の状況からみて、米沢本沙石集と天正狂言本に反映している言語のオ列音・ウ列音の音韻的特徴におおきな差異が存するとは結論できない。表記の実態を、両者の背景にある言語の音声的な実質と直接にむすびつけて解釈すべきではなく、まず一次的には、表記の問題としてとりあつかうべきである》と主張した。

のこった問題としては、やはり短音の交替表記(シュ↔ショ)と長音のそれ(シウ↔セウ)とが、いかなる関係にあるのかを説明することがある。しかし、文献にのこされた表記のみからそれについて決定的な結論をうるのは困難であろう。今後の課題として、究明につとめたい。

#### 注

(注1) 梅崎光「米沢図書館蔵倭玉篇の字音の拗音表記」(「語文研究」82, 1996年12月)参照。

(注2) 米沢本倭玉篇の本文、および用例の所在表示の方法は北恭昭氏編『倭玉篇五本和訓集成』本文篇・索引篇(汲古書院, 1994年3月~95年1月)による。

(注3) 川本栄一郎氏「東北方言の音韻」(『方言研究の問題点』平山輝男博士還暦記念会編, 明治書院, 1970年8月)17~20頁, 加藤正信氏『方言学講座 第2巻 東部方言』(東京堂, 1961年3月)372頁, 馬

瀬良雄氏「北信濃小川村桐山の方言」（『北信濃小川村桐山の民俗』1973年4月。頁数は『日本列島方言叢書第8巻 中部方言考1 中部一般・長野県』ゆまに書房、1996年1月、による）50頁など。

(注4) 「米澤善本解題」『米沢善本の研究と解題』（内田智雄氏編、ハーバード・燕京・同志社東方文化講座委員会刊、1958年8月）128頁。

(注5) 注4文献14頁。

(注6) 米沢図書館所蔵のマイクロフィルムによる。

(注7) 「肅」からの類推による音注とみなす。

(注8) 「抄」と誤認しての音注とみなす。

(注9) ケウの誤写とみる。

(注10) ロウの誤写とみる。

(注11) 以下、米沢本沙石集に関するデータは、片岡了氏「米沢市立図書館蔵「沙石集」の拗音表記」（『大谷学報』55-3、1975年12月）53～55頁にあげられた用例による。

(注12) 注1文献54頁。

(注13) 迫野虔徳氏『文献方言史研究』（清文堂出版、1998年2月）の第三章第一節「オ段（合音）・ウ段長音表記の動揺」参照。

(注14) 吉川泰雄氏「近古国語に於ける長拗音「ゆう」と「よう」の相関」（『近代語誌』角川書店、1977年3月）など。

(注15) 注13文献189～191頁参照。

(注16) 本稿でとりあつかう天正狂言本の用例は、内山弘氏編著『天正狂言本 本文・総索引・研究』（笠間書院、1998年2月）302～306頁に列挙されたものによる。

(注17) 以下、注16文献302～309頁の記述をもとに要約。

(注18) 注16文献307頁。

(注19) 注16文献308頁。

(注20) 注16文献309頁。

(注21) 注16文献308頁による。

(注22) たとえば、注13文献第二章第一節「促音と撥音の表記の動揺」によると、促音や舌内入声韻尾を「つ」の別字体をもって表記しわけている。また、長谷川千秋氏「直音と拗音を書き分ける仮名文字遣」（『国語国文』66-07、1997年7月）では、「ゆ」の別字体を、「おしゆる（教）」と「しゆ生（衆生）」のような直音と拗音にそれぞれふりわけていることが指摘されている。

(注23) 注11文献の65頁注(22)によると、「至要（シユウ）」「幼主（ユウシユ）」といったヤ行の交替表記例が、「要（ヨウ）」「幼（ヨウ）」「遥（ヨウ）」のようなオ列表記（こちらが主流とのこと）に対して若干例あるとのことである。ここでは、こうした表記のあらわれる条件として、「[ヨウ]が実は[o:]よりは[u:]によった音で、そのために或る場合「ユウ」という表記が現われてしまったと見てよいのではなかろうか」との言及があるが、この現象と開合の区別との関連についてはふれられていな

い。

(注24) 注11文献64頁注(7)参照。

(注25) 本文(5)にあげた例からみると、米沢本千字文においてはこの傾向が天正狂言本よりも顕著なようである。